

# 持続可能な生き方を考えるための 日本語教師研修の提案

## —対話的問題提起学習とロールレタリングの協働実践—

唐澤麻里・小浦方理恵・鈴木寿子

### 要 旨

日本語教師の雇用の不安定化が顕在している現在、教師の持続可能な生き方を考えるための教師研修を実践可能なものとして提案することが必要である。本研究は、現職日本語教師の持続可能な生き方を考える自発的で自律的な教師研修のデザインを模索することを目的として行った。具体的には言語生態学を理論的背景として「対話的問題提起学習」と「ロールレタリング」という実践を、かつて同じ大学院で学び、現在は職場の異なる三人の仲間で試みた。約3か月にわたって4回の活動を行った結果、三人の間で言語を活性化し内省および対話が実現し、社会の現状に対する理解、自己理解、他者との相互理解を深めることができた。こうした点から考察すると、「対話的問題提起学習」と「ロールレタリング」を組み合わせた本実践は、持続可能な生き方を考えるための教師研修の在り方の具体例を示したと思われる。

【キーワード】言語生態学、内省、対話、自己・他者・社会理解、生態学的リテラシー

### 1. 問題と目的

近年、世界的な金融不安および急激な社会情勢の変化の下で、今後の先行きが不透明となり雇用状況の悪化が著しい。それは日本語教師にとっても例外ではない。民間日本語学校では、学生数の減少が即、担当コマ数の減少につながる。また、大学に目を向けると、2013年4月に、有期契約から無期契約への切り替えを進め雇用を安定させる目的で労働契約法が改正されたが、当初の目的を逆行するかたちで大学などが非常勤講師を原則5年で雇い止めにする動きも見られる（朝日新聞2013年6月14日）。このように日本語教師の現状は安定した生活が保障されているとは言い難く、日本語教師の生き方の見通しも立てづらいものになっていると言えよう。

こういった厳しい状況のなか、日本語教師が自らの、そして学習者の持続可能な生き方を探求し、教育現場に生かしていくことが必要である。その方法として教師研修を通じて自身を成長させることが考えられる。だが、国内の日本語教師の大半はボランティアであり（56.6%）、次に非常勤講師（29.6%）として働くことが多く（文化庁、2012）、継続的な教師研修を受けられないことが珍しくない。自己研鑽のため研修に参加しようにも、開催地や費用などの制約から十分な機会を得られないのが実情

であろう。その上、日本語教師の多くが日々の授業で手いっぱいであり、特に非常勤講師は時間的制約のなか複数現場を掛け持ちしていることが多い。日本語教師は職業上、言語を扱っているのにも関わらず、教師同士が職場内で持続可能な生き方について十分話し合える機会はほとんどないと言ってもいいだろう。

このような現状から、現職日本語教師の継続的な成長のため、教師同士がつながり、研修や支援によってお互いに支えられることが必要であると考えられる。

筆者ら三人は、かつて同じ大学院で学び、現在は異なる職場で働く現職日本語教師である。上記のような問題意識を共有し、筆者らは2012年の春から定期的に集まり、講師などを招聘する大がかりな形式ではない、より自発的・自律的に行いやすい教師研修の形を模索している。本実践が、日本語教師が互いの成長を支え合い、生き方を能動的に構築していける教師研修の一環となりうるのか考察したい。

### 2. 理論的背景と手法の概要

#### 2.1 言語生態学と生態学的リテラシー

本実践研究では理論的背景として、言語生態学（岡崎、2009）を用いる。言語生態学とは、言語の

状態がよい状態にあるのは言語活動の起こる人間活動がよい状態にあるからだという考え方に立ち（岡崎, 2009:xi）従来の言語学でなされてきた言語の記述・分析だけでなく、人間活動と一体化して起こる言語の保全・育成を目指す学問である。本稿冒頭で見たように、現代社会では、人の雇用が安定化せず、生存が脅かされている現象があらわれている。岡崎はこのような社会では、言語が形骸化し、想像力が縮退した結果、世界がなぜこうなっているのかが見えにくくなっていると指摘し、この状況を克服し、言語の状況を保全・育成するための「生態学的リテラシー」という概念を提示している。

生態学的リテラシーとは「生き方のベースとなる基本的な能力」であり、「『持続的な生き方を自分なりにどのように築き上げていくか』の問いと、世界に対する認識を関連付けることによって、変動する世界を能動的に認識する過程を形作り、具体的に実践していく能力、また実践の中でその認識を修正・改善しつつ、育成していく能力（岡崎, 2009:64-65）」である。岡崎（2009:104）が生態学的リテラシーの育成のための方法として示しているのが、「対話的問題提起学習」と「ロールレタリング」である。筆者らは、日本語教師も現代社会と切り離された存在ではなく、言語の形骸化・想像力の縮退にさらされている一市民だという認識を共有し、日本語教師の言語の回復・改善を目指し、これらの手法を取り入れた研修を実施することにした。

「対話的問題提起学習」と「ロールレタリング」は内省と言語化を往還する過程を繰り返しながら、言語を活性化させるために、他者と協働で行うことが前提となる活動である。この活動によって、参加するものは「世界に存在するリスクが自他の間で共有されていることの認識、自覚を媒介とした他者の視座を感知しつつとらえる力」を獲得することが期待でき（岡崎, 2009:84）、日本語教師が自らの雇用や生き方、社会のありようについて語れる場を設けることにつながり、生態学的リテラシーを高められると考える。次節では、「対話的問題提起学習」と「ロールレタリング」がどのような手法であるのかを述べる。

## 2.2 対話的問題提起学習の概要

対話的問題提起学習とは、共感的態度で自分と相手の感じ方、考え方を理解し、対話を通じて人間的なつながりをつくるための異文化学習の方法（岡

崎・西川, 1993）である。具体的には、まず各自でテキストを読む。ここで言うテキストとは教科書の意味ではなく、社会におけるある問題状況を示したものを指す。読む側は、テキスト上の当事者の置かれている状況をできるだけ細部まで思い浮かべながら読む。その後、テキストの内容について後述の対話メモを作成し、それを基に対話を行う。

## 2.3 ロールレタリングの概要

ロールレタリングは、一人二役を演じて往復書簡を交わすもので、相手の気持ちに気づき、自己の問題解決力を促進させていく心理技法である（春山, 1995, 岡本, 2007）。具体的には、まず実際の人物または事例のなかの人物に対して手紙を書く（往）。そして、今度はその手紙を受け取った人になったつもりで、自分の書いた手紙に対して返事を書く（復）。こうした手紙のやり取りのステップを辿ることで、他者の気持ちに寄り添いながら状況を捉えることができるという特徴がある。

## 3. 活動の概要

ここに本活動の流れを図にして示す<sup>1</sup>。はじめに対話的問題提起学習を行ったが、実践にあたって事前に各自テキストを読み、メモを書いて持参し、そのメモをもとに対話を行った。後日（本実践では対話の約1カ月後）ロールレタリングを行った。各自、事前に向・復の二通の手紙を書いて持参し、共有後、意見を述べ合うかたちで対話を行った。最後に日を空けて（本実践では約1カ月後）活動全体について自由に対話し、ふり返りとした。

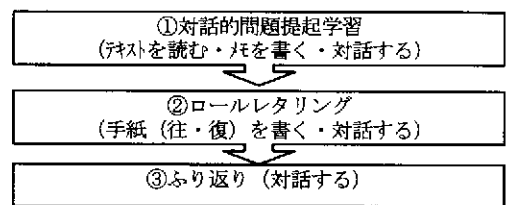


図 1. 活動の流れ

## 4. 対話的問題提起学習の活動内容と分析

### 4.1 使用したテキスト

現代社会における人々の働き方の実態を理解する目的で、岡崎（2009）『言語生態学と言語教育』にある就職氷河期に正社員としてIT企業に入社した若者（テキストに名前がないため、便宜上、「たけし」と名付けた）が書いたテキストを使用した。

以下、その内容の概略を述べる。

就職氷河期だったが、自分はIT大手企業に就職できた。顧客対応、上司への報告、プレゼンに際限なく時間がかかり仕事にのめり込んだ。社宅に入って通勤時間が短くなり、仕事を残して帰宅することは減った。その頃、別の会社に出向させられた。窓のない狭い部屋だった。7時に社宅を出て、深夜まで仕事をしていると、時間がわからない。3、4日間、人とも話さない。食事は2食分、出社前にコンビニで買う。睡眠時間が減り、週末休みがとれず、人との接触がなく、これが続くともいえるなと思った頃、本社に戻るよう言われた。本社の仕事は楽しかったが、欲張って働き過ぎた。8月、体調が崩れ、吐き気が激しくなった。8月10日にダウンし、初めて欠勤の電話をした。上司から「今日は上司に説明をしなければならぬので、出てもらわないと困る」と言われた。「気分が悪くて、出社してもきちんと言明することができない」と言うと、「少しでも出るように」と言われて行った。部長と話している時に気分が悪くなった。気がつくとも救急車の中だった。即入院だった。お盆の翌日、会社に辞表を出した。実家に戻った。自分が失業保険を受けるとは思わなかった。友達からの励ましは救いだった。暗中模索の不安の中にいた。(岡崎(2009) P.128-131より抜粋、要約)

#### 4.2 対話メモ

テキストを読んだ後、以下の質問に答えながらメモを作成した。

- ① ここではどんなことが起こっているか。
- ② 文章の作者は、ここで何を感じていると思うか。
- ③ 文章の作者の感じ方、問題の設定の仕方についてどう思うか。
- ④ もし、この話が自分のことだったら、どう感じ、どう行動するか。

上記のメモを作成してきた後、三人で集まって対話を行った。対話は各自作成のメモに沿いつつ行ったが、対話中にその場で考えたこと気づいたことも自由に発言した。

#### 4.3 対話的問題提起学習の分析結果

対話的問題提起学習は2時間25分に及んだ。録音を文字起こしし、文字化データにした。そして、データの対話内容に着目し、対話の進展とともにその内容はどのように展開していったのかを質的に分析した。分析は実践を行った三人全員で行った。その結果、対話は3つの段階を踏み深化していったことがわかった。段階①：たけしをリソース(学びの資源)として自己をふり返る、段階②：社会や労働の現状を考える、段階③：社会へのアクションや人間的な労働のあり方を考える、の3つである。以下、3つの段階における対話の断片をそれぞれ紹介する。以下、三人をそれぞれA、B、Cとし、分析で着目した個所には下線を引いた。

#### 段階①：たけしをリソースとして自己をふり返る

- B「私あんまり(自分の悩んでいることを)言わないかもしれないなと思って。(中略)自分自身も言語化しないから問題点がわからないまま。でも、今忙しい大変だっという、うやむやなまあいっちゃうのは反省だと思って。不安不調を言語化して」
- A「言語化できる時点で他者に依存できるのかもしれないね。そこでつながっているのかな」  
(中略)
- C「人に心配かけたくないとか、そういうのあるんじゃない?多分」
- B「そんなに人に心配をかけることには抵抗はないと思うんですけど。言ってもどうしようもないっていうの自分不安になるから言わない」
- A「うん。言うとな不安になるよね」  
(中略)
- C「私は結構言っちゃう。相談するほうだと思う。何かあったりするとためられない。言いたい。愚痴りたい。言うとか客観視して話さなきゃいけないじゃん。人に話すことで、頭のなかで状況とかがちょっと整理される部分はあつて」
- A「言える時点で、もう既にそれって解決へ動いている気がする」

この部分は、たけしが体調を崩すほどにまで仕事にのめり込むが、その状況を同僚や上司などに全く相談をしていないことに着目し対話をしている場面である。自分が働き方などで困難や悩みがあるときに、他者に言語化して伝えるかを話題としている。言語化することによって、不安が呼び起こされる半面、自分の置かれている状況が客観視でき、問題の整理、解決の糸口となるという意見が出された。このように、この対話部分では、たけしのテキストを基に各々が問題状況下でどのような行動をとるかにについて自身をふり返っている。

#### 段階②：社会や労働の現状を考える

- C「彼の場合は個人的背景があるかもね。働くっていうのはこういうもんだみたいな。大変さも受け入れるけど変えるべきものと思っていないうか…社会的なものもあるのかね。せっかく正社員になったんだから、辞めたらもう二度とレールに乗れないっていうか。昔よりも若い人のほうが感じているかもね。なにか危機感がある気がする。だから余計無理しちゃうっていうか。ほかの国でもそうなのかねえ」
- A「ブータンだっけ?幸せの国みたいな。もしも例えば自分の家でお米がとれて野菜がとれれば、…自分がこの会社で働かなくても最低限食べるっていう自信があるから、そんなに仕事に命を売るようなことはしないっていうことを言ってる」
- B「もし今お米が採れたとしても、明日畑耕さなきゃ。面倒くさい。だったらその時間違う仕事してたほうがいいと思いますもん」
- A「自分の食べ物は他の人に依存して自分はその誰かが作ったものを買うお金を労働によって得るっていう考え方だよね」
- B「買ってまでその労働をしたいと思ってる。なんか本末転倒ですよ」
- A「人間として本来大切にすべきものまで他者に依存し

ちゃっているような感じがあって…本当に生活が忙しくなると外食することさえ当然だみたいに思ってくるけど。(中略) どんな人間も自分の食べるものは自分でとか人間本来の営みって忘れていけないような気もして

- C「隙間産業とかに任せすぎたんですかねえ。深夜も営業してるとか、主婦に助かるとか  
B「お金で解決してるよね、それは」

この段階では、なぜたけしが一人で問題を抱えてしまったのかというところから、現代の若者が抱く危機感、またその危機感の背景にある経済悪化や景気減退などの社会情勢について話題が及んでいる。食糧を自らで調達できる第一次産業から、第二・第三次産業へと労働者が移行し、働く人をとりまく環境や働く人が持つ考え方も急速に変化していること、社会情勢の影響を受けやすくなっていることを確認している。また、生活の糧である食へと話が進み、人間本来の営みや人間らしい生き方について意見を述べ合うかたちとなった。

### 段階③：社会へのアクションや人間的な労働のあり方を考える

A「彼は自分の話にしてるもんね、働き方を。そもそもこういう働き方になっているのを、社会がどういうふう になってるからなのかと疑ったりしてない。全部自分の 問題として考えたから辞めちゃったような気がするし」

C「したら、社会に問題があると考えたらどうアクション できるかな」

A「周りの人とつながろうとする。こんなに働かされてるのっておかしくないかみたい に思ってる」  
(中略)

B「どんどん自分の人間らしさを切り捨てていってるところ がある。隙限なく時間がかかることも、自分の時間を すべて充てちゃってるし、仕事の全体像が見えない っていうのも、すごく気持ち悪い働き方だけど、どの 社員もスケジュールぎっちりで余裕がないことも受け 入れちゃうし。朝日にも触れず蛍光灯の下で仕事。人 らしい働き方をどんどん切り捨てちゃってる。アルバイト とかマニュアルとかあなたほこれさえすればいい とか全体像を見えなくさせる働き方って人間らしさも 切り捨てちゃうんですかね」

C「考えなくてよくなっちゃうもんね」

対話の最後には、たけしが自身の職場環境の問題を全て自分のせいにしており、その背景にある社会情勢に問題を感じていなかったことが語られた。そういった社会に対して問題を感じた場合に自分たちならどのように行動を起こすのか、また、人間らしい働き方とはどのようなものか、といったところまで話し合いが行われた。この対話の1カ月後に、ロールレタリングの活動を行うこととした。

## 5. ロールレタリングの活動内容と分析

### 5.1 たけしへの手紙 (往)

筆者らは、各自でたけしに対する手紙を書き、その後、たけしになりきって返事の手紙を書いた。これら二通の手紙を持参して、再度集まることにした。たけしへの手紙、およびたけしからの返事は、実際には各自 A4 サイズ 1 枚程度で書いたが、ここでは抜粋して掲載する。

(A) ゆっくり休むための時間だと思って、まずは心と体をしっかり休めてほしいです。(中略) 私の状況ですが、大学院で勉強しながら、非常勤で日本語教師として働き始めたよ。週 2 回の非常勤だから働く時間も限られているし、大学院での勉強が今のところメインだから、仕事を 100%にできないジレンマも感じる。だからこそ、自分の状況を周りの人に話して理解を得たり、勤務先の先生方に、クラスや学生の様子をこまめに聞くことって大事な、と思ってる、仕事先に早めに着くようにして、授業準備の時間にいろんな人と話すようにしているよ。

A は、たけしを高校時代の友人に見立て、大学院在学中に日本語学校に勤務していた数年前の自分の立場から手紙を書いた。自分がどのように職場でコミュニケーションを取ろうとしているかなど、働き方の状況を説明するものであった。正社員として昼夜を問わず働いており、周りの状況が見えていなかったと思われるたけしに対し、正社員としての働き方が全てではないこと、働く上では職場の仲間とのつながりを大事にすべきであると考えていることを A は手紙を通して伝えようとした。

(B) 状況とか、気持ちとか、よくわかるよ。こういうの って私たち、どうしたらいいんだろうね。私はまだ理想 とする働き方をしている人を見つけられなくて、わから ないままです。今までの働き方は正しくないって思っ ていても、どうしようもなかったって感じているんじゃないかな?

B はまず、たけしの状況に強い共感を示し、自分とたけしを「私たち」と一括りにして表現している。たけしと自分の状況を重ね合わせつつも、どうアドバイスしたらいいのかがわからず、まさに今自分も理想的な働き方を模索中であると伝える手紙を書いた。

(C) 私だったら辞める前に、会社に対して言いたいこと を一応「提言」として伝えてから辞めていたかもしれま せん。窓もない部屋で働かせるなんて人間的ではないで しょう?それから周りの先輩とか上司とか、特に同期の 友達などがどんな気持ちで仕事をしているのか、何にや りがいを感じ、何を悩んでいるのか聞いてみたかもしれ ません。そうすれば、自分の仕事に対する考え方とか働 き方になにかヒントがあったかな、なんて。

C もたけしを昔からの友人と捉え、たけしの心情や体にとっては好ましくなかった仕事を辞めるという判断については肯定した。しかし、その後、たけ

しの置かれていた職場環境が非人間的であったことに触れ、自分がたけしであれば問題解決のアクションを何かしらとっていただろうと述べた。

## 5.2 たけしからの返事（復）

上記の手紙を受け取ったたけしになりきり、今度は各自がたけしからの返事を記した。ここでも抜粋して述べる。

(A) 辞めちゃったものは仕方ないし、あのまま働いていたら過労死まで自分を追い込んでしまったかもしれないので、くよくよしないようにしている。おかげさまで体調も戻ってきたので、母親の知り合いの紹介で、塾講師のバイト始めたよ。地元の人のネットワークのおかげで、仕事ももらえたから、ありがたいよ。

Aによる、たけしからの返事は、地元に戻ったたけしがこれまでの残業続きの会社員生活から離れ、学習塾で講師のアルバイトを始めていることを告げるものである。アルバイトの仕事は母親の知り合いからの紹介で、たけしは「地元の人のネットワークのおかげ」と評価している。退職後のたけしの回復と新たな生き方の模索を示唆する内容の返事を綴った。

(B) 今まで自分以外の人の話を聞いたり、自分のことを人に相談したりせずに、全部抱え込んでいた気がする。これからは仲間や先輩に相談したりしながら、人生を考えていこうと思っているよ。でも、これから社会に復帰できるかどうか、頑張っている同期のことを考えると、不安になるんだ。

Bの書いたたけしからの返事は、たけし自身の気づきや思考を述べるものであった。仕事を辞める前の自分の考え方やコミュニケーションの取り方を反省し、今後はより周囲との関係を大切にしようとする前向きに考えながらも、自分は社会復帰できるのかについて不安に思う気持ちがあり、その不安を吐露する内容になっている。

(C) 現実をもっと過酷だったんだぞ。目の前のことをできる限りこなすことで精一杯だったんだ。誰かに相談したり話したりする気持ちになんてなれなかったし、周りの人もそんな余裕がないように見えた。(中略) 何かやりがいがあったからこそ、あそこまで働いていたんだと思う。でも体調を崩してから、なにか自信がなくなってしまった。仕事のことを考えると、気分が悪くなってしまうような気がして、積極的に何かしようという気持ちになれなかった。

Cの書いたたけしからの返事では、問題解決へのアクションをとったほうがよかったのではないかという友人からの助言に対して、反論するかたちをとっている。職場環境の改善のため積極的に行動を起こすことができず、特に体調が崩れてからは自信もなくなったと当時の厳しい状況や心情を説明する手紙を記した。

## 5.3 活動全体のふり返り

このロールレタリングの実践について、各自ふり返りのメモを作成し、活動の約1ヶ月後に集って活動全体のふり返りとなる対話を行った。Aは、自分の書いた手紙について「彼によくなってほしいという願いを込めて、手紙を書いた」と対話で述べ、書いた手紙についてふり返っている。メモには、自分の考えが変わったところとして「仕事というのは生活の目的でもある。それを通じて人格を形成するという側面がある。なので、挑戦してみる価値がある」と記述した。テキストを読んだ当初は、たけしが社会人として未熟な人間として思えたAだが、三人での対話を経て、仕事人間にもたらずものが経済的な安定だけではなく、人格を形成するという側面もあることに目を向けるようになった。それによって、たけしが仕事にのめりこんだ理由を共感的に理解できるようになったと書いている。Bは自分の考えが変わったところについて、メモに次のように記した。「人生に仕事を位置づけることに気付いた。周りに相談する必要性を感じた。客観的に自分を見て、他者と共有し、環境を変えようとしないと、自分のような人が増える。自分は愚痴を言ったり、悩みを相談しないわけではないが、問題を自分のなかだけに留めてしまうところも確かにある。それは、変えられるものと思っていないから」ふり返りの対話では「たけしと私、一心同体、二人で路頭に迷っているようだった。手紙を書いてすっきりというよりは、もやもやした」と述べている。Cはメモに「目の前にある仕事や任された任務を精一杯こなしたいと思う人がいることを知った。余裕のなさから一人で問題解決しようとしてしまう状況も存在すると思った。仕事に対して誠実に励もうとする気持ち自体は、とても尊いもののように思えた。対話を通して、自らの視点だけでなく他者の立場が理解できたような気がした」と記した。ふり返りの対話において、対話的問題提起学習の際には、たけしのコミュニケーションの未熟さを感じたが、対話を行ったことでロールレタリングの段階では、たけしの置かれた状況や心情をより深く想像することができたという感想を述べた。

手紙の内容の差違は、三人のコミュニケーションスタイルや問題解決方法の差違を反映しているように思われた。手紙を共有した後のやりとりで、三人の手紙の内容が三者三様に異なっていることを確

認し、自分が書いたもの以外のたけしのストーリーを想像することができた。また、ロールレタリングの前に対話的問題提起学習を行ったことで視点が広がり、手紙に影響をもたらしたことが述べられた。二つの活動の実践を通じて三人はそれぞれ自己理解、他者理解が進み、自分や身近な他者が同じような状況に置かれた時の選択肢が増加したように感じられた。

## 6. 考察

実践とその分析を経て、対話的問題提起学習とロールレタリングを組み合わせた本実践がどのような構造であり、何をもちたらすのかについて考察し、構造図(図2)を導いた。図は時系列に沿って、左の〈内省時〉、中央の〈対話時〉、右の〈実践後〉に分かれる。本実践の対話的問題提起学習とロールレタリングは、内省と対話を中心とする活動であり、両活動は〈内省時〉と〈対話時〉を往還する。

〈内省時〉では各自がテキストを読んだりメモや手紙を書いたりして、たけしの状況や気持ちを想像し、自らの状況と重ね合わせるなどを行った。

〈対話時〉では、実社会の在り方を議論し、自分ならどうするかということ話し、聴き合った。これによって、自分以外の他者がどのような選択肢をもって生きようとしているのかを理解した。〈実践後〉は、活動全体のふり返りとして、この活動で何が起こっていたのかを再び内省した。

今回の活動のリソース(学習の資源)は対話的問題提起学習におけるテキストに登場したたけしの他、「自分がたけしならどう感じ、どう行動するのか」という考えをもって臨んだ三人も互いのリソースとなったと言える。リソースの中にあつた他者が、自己の内省の中に内在化され、より選択肢を得た自分となったことが実感された。また、テキストにおける問題を個人内に留め、些末なものとして扱った

り、反対に、自分では解決できない問題だと決めつけて、思考を停止したりせず、問題を自分と社会の中に位置づけることができた。

本活動では、社会はどうなっているか、どう働き生きていくかという、日本語教師である前に人間としての生き方にかかわる根本的な問いを扱うこととなった。また、たけしの働き方から翻って自らの働き方を顧みただけで、働き方を言語化し、周りと共有することや人間的な職場環境の重要性を確認した。そして、雇用の不安定な日本語教師として働く上で、誠意をもって教育に当たりながらも、人間らしさを失わないように働きたいという三人の共通の意志を確認することもできた。一連の活動で、教師同士が支え合いながら問題解決の糸口を見い出せたように実感された。

対話的問題提起学習とロールレタリングを組み合わせた本実践で可能になったことについて、2章で確認した生態学的リテラシーの定義に照らし合わせて考えてみたい。生態学的リテラシーとは、『「持続的な生き方を自分なりにどのように築き上げていくか』の問いと、世界に対する認識を関連付けることによって、変動する世界を能動的に認識する過程を形作り、具体的に実践していく能力、また実践の中でその認識を修正・改善しつつ、育成していく能力(岡崎, 2009:64-65)』である。本実践では、上記の下線の部分に着目する。この観点を踏まえると、下線を引いた部分は、以下の3点でまとめられる。

- ①能動的認識：実社会で起こっている問題を俯瞰的・構造的に捉えること。
- ②認識の修正・改善：実社会の動きとつなげて、自分の今の状況がどうなっているのかを客観的に理解すること。
- ③認識の育成：他者の方法を知り、他の選択肢を知ること。

これらは、今回の活動に参加した筆者ら三人にとって、想像力の回復であり、生態学的リテラシー

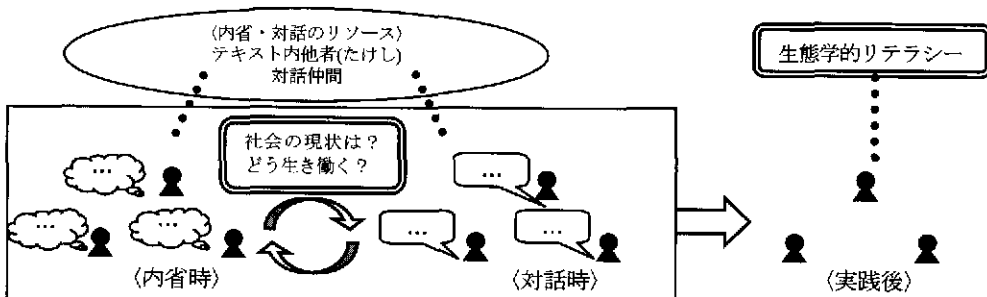


図2. 対話的問題提起学習とロールレタリングの協働実践の構造

の深まりであると考えられる。世界とそこに暮らす人々に対する理解を複層的に進めることができ、また自身や仲間への理解を深める機会となった。

本論文の第1章で述べたように、言語を扱う日本語教師は実は職場環境で社会の現状を理解し、自身の生き方を能動的に構築するための言語を十分に使えているとは言えない状況に置かれている。このことは言語生態学の視点から述べると、日本語教師の言語の保全・育成がなされていないことを示す。本活動を通じて、活動を行った三人は、普段の言語生活では十分に検討することができない「社会はどうなっているか、そこでどのように働き、どう生きていくか」などの問いに取り組むために言語を使用することができた。それによって、言語が活性化しよよい状態、つまりその言語活動を行う人間活動もよよい状態になったことを実感できた。このことは、本活動が日本語教師の言語の保全・育成を図ることのできる活動であることの証左だと言えよう。また、活動中のリソースとなる他者に寄り添い理解しようとする姿勢は、日本語教師として様々な背景を抱える学習者理解を進める上でも重要ではないだろうか。

## 7. 今後の発展性と本研究の意義

従来の日本語教師の成長とは、教案作成や学習者指導など主に授業時のスキルの観点から捉えられてきた(川口・横溝, 2005 ほか)。その際、授業そのものに関連する技術向上や他者評価を教師の成長と結びつけることは盛んにされてきたが、教師の生き方や人間生活を対象とすることにはあまり目が向けられてこなかった。この点において本実践研究が目指したのは、教師の人間生活の充実である。具体的には、身近なテキストを取り上げながら、現在、日本語教師や学習者を取り巻く世界で起こっていることを題材とし、自分の考え方を掘り下げ、仲間の考え方を知ることによって、各自の生きている文脈に密着したやりとりを行った。つまり本稿では、言語生態の保全を図ることのできる日本語教師研究を行ったと意義づける。雇用や食糧問題など、人々の生存が危機にさらされ、言語が人の生存を支えるものとして存在していない現在、言語教師である日本語教師がまず仲間と共に自分の状況をふり返ることにより社会を理解し、そこに自分を位置付けるための言語の回復を図ることは、日本語教師の技術向上と同様に価値あることだと考える。

今回の実践がスムーズに実施できた要因の一つに對話相手が既知の仲間であったことが考えられる。すでに信頼関係ができていた既存のネットワークを生かしたことで、より深く共感的に對話が行えたのではないだろうか。そしてその結果、既存の人間関係を再活性化し、對話相手とのつながりを以前より深めることができた。非常勤として働く日本語教師たちは様々な現場で働いた経験を持っている人が多い。日本語教師になる以前にも養成講座や大学、大学院など既存のネットワークを形成している。本実践のように、既存の人間関係を再活性化させる形式で教師研修を行うことは、講師を招聘し、参加者を募る形式の研修に比べ、実施可能性が高いのではないだろうか。活動自体も筆記用具さえあれば簡便に行えるものであるため、自発的で自律的な教師研修として展開できるだろう。

- 注 1. 本実践は以下のとおり行った。【】内は時間である。
- 第1回 (2012/7/22) 事前打ちあわせ。【1時間16分】
  - 第2回 (2012/8/11) 対話的問題提起学習【2時間25分】
  - 第3回 (2012/9/15) ロールレタリング【2時間44分】
  - 第4回 (2012/10/21) 全体のふり返り。【1時間7分】

## 参考文献

- 朝日新聞 (2013年6月14日)朝刊「大学、5年でクビ?非常勤講師、雇止め動き 無期契約避ける狙い」
- 岡崎敏雄・西川寿美 (1993)「学習者とのやり取りを通した教師の成長」『日本語学』12 (3), 明治書院, 31-41.
- 岡崎敏雄 (2009)『言語生態学と言語教育』凡人社
- 岡本泰弘 (2007)『実践“ロールレタリング” いじめや不登校から生徒を救え!!』北大路書房
- 川口義一・横溝紳一郎 (2005)『成長する教師のための日本語教育ガイドブック』ひつじ書房
- 春山徳雄 (1995)『ロールレタリングの理論と実践』チーム医療
- 文化庁 (2012)「平成23年度国内の日本語教育の概要」  
[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/jittai\\_chousa/h23/gaiyou.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittai_chousa/h23/gaiyou.html) (2012年12月14日アクセス)

## 付記

本研究は科研費若手研究 (B) (23720260)「共生社会の構築に資する持続可能性教育としての日本語教師養成プログラムの開発」(研究代表者:鈴木寿子)の助成を受けたものである。

からさわ まり／文化外国語専門学校 国際通訳翻訳科  
marikrsw@yahoo.co.jp  
こうらかた りえ／お茶の水女子大学 文教育学部  
kourakatarie@gmail.com  
すずき としこ／早稲田大学 日本語教育研究センター  
suzuki.toshiko@toki.waseda.jp

## Suggestion for the Japanese teacher training which deepens understanding of sustainability

— Collaborative practice of Problem-posing Learning and Role Lettering —

KARASAWA Mari · KOURAKATA Rie · SUZUKI Toshiko

### Abstract

In this paper the authors discuss a method of Japanese language teacher training which fosters autonomous teachers and encourages a broader view of education beyond a focus on pedagogical techniques. In order to demonstrate the efficacy of this method, the authors practiced Problem-posing Learning and Role Lettering based on the theory of Language Ecology. Through this practice, three teachers realized deep introspection and engaged in quality discussion by activating language. This enabled the teachers to deepen self and mutual-understanding, and to achieve a broader understanding of society's present circumstances. The study additionally suggests possibilities for autonomous teacher's training using existing interpersonal relationships.

【Keywords】 Language Ecology, reflection, dialogue interactions, self-understanding, mutual understanding, understanding the present society, Ecological Literacy

(KARASAWA: International Interpretation-Translation Course, Bunka Institute of Language · KOURAKATA: Faculty of Letters and Education, Ochanomizu University · SUZUKI: Center for Japanese Language, Waseda University)